

令和5・6年度 板橋区青少年問題協議会 第2回全体会

開催日時 令和6年11月8日（金） 午後6時30分～  
開催場所 板橋区役所南館6階 教育支援センター研修室ABC

出席者

[illegible]

出席職員（幹事）

産 業 振 興 課 長 藤 原 仙 昌  
生 活 支 援 課 長 渡 辺 五 樹  
子 ど も 家 庭 総 合 支 援 セ ン タ ー 支 援 課 長 吉 田 有  
指 導 学 習 セ ン タ ー 課 所 長 清 水 隆  
生 涯 学 習 セ ン タ ー 課 所 長 富 田 己  
成 域 生 涯 学 習 セ ン タ ー 課 所 長 太 田 晃  
地 育 教 育 支 援 セ ン タ ー 課 所 長 高 野 一  
教 育 支 援 セ ン タ ー 課 所 長 石 野 平  
教 育 支 援 セ ン タ ー 課 所 長 高 野 惠

## 【開会】

- ・ 会長あいさつ
- ・ 新任委員及び幹事紹介
- ・ 委員及び幹事紹介

## 【議事】

### 坂本会長（板橋区長）

それでは、次第に沿って進行させていただきます。はじめに「（１）本日までの経緯及び今後のスケジュールについて」事務局から説明をお願いします。

### 高木課長（地域教育力推進課長）

それでは、事務局から、資料２に基づきまして、本日までの経緯及び今後のスケジュールについて、ご説明いたします。資料２をお手元にご用意いただけますでしょうか。

まず、令和４年度に開催されました青少年問題協議会の議論を踏まえまして、昨年１０月３０日に開催されました、令和５年度第１回全体会におきまして、令和５年度・６年度の青少年問題協議会の審議テーマを「不登校の背景を的確に捉えた、多面的な支援の実現に向けて」とし、専門部会として「アプローチ手法検討部会」、「居場所検討部会」の二つを設けたところでございます。

この二つの専門部会を設置した背景としては、不登校問題の課題として、「個々の状況に応じた支援の必要性」、「居場所の確保の必要性」が挙げられ、それぞれの課題への対応を協議するため、「子どもや家庭の置かれた状況に対し的確な支援を行うためのアプローチ手法」、「子どもたちが安心して過ごすことができる居場所の確保並びにその機能を強化する方法」を検討するとしていたところでございます。

これまで、第１回から第３回の専門部会を開始しておりまして、それぞれの専門部会での協議内容は、各部会長からご説明いただきますが、２月に開催しました第１回の専門部会では、まずは、現況の把握と問題意識について共有を図り、その中で出ました、当事者の考えを聞いてみたいという意見を踏まえまして、７月頃にアンケートを実施いたしました。

その後、７月中旬に開催しました第２回の専門部会では、具体的にテーマについて協議を行いまして、それぞれの専門部会の議論を事務局で論点整理したものを踏まえ、９月頃に第３回専門部会を開催し、提言の内容や事務局からお示しした提言構成案についてご議論いただきました。

これらの協議内容については、後ほど各部会長からご説明をいただきます。

本日は、第２回全体会となりまして、専門部会の協議経過報告をさせていただくと同時に、意見交換を議題とさせていただいております。

今後のスケジュールとしましては、１月頃に第４回専門部会を開催し、提言

内容を調整させていただいたのち、3月頃に第3回全体会を開催し、提言の決定を予定しているところでございます。

簡単ではございますが、説明は以上でございます。

### 坂本会長（板橋区長）

つづきまして、「(2) 協議経過報告」に移ります。これまで3回開催された各専門部会の協議報告と、アンケート調査及び要点整理内容につきまして、ご報告いただきたいと思います。

それではまず「①第1回専門部会報告」について、アプローチ手法検討部会・部会長の平戸副会長から、続いて居場所部会・部会長の児美川副会長からご報告をお願いいたします。

### 平戸副会長（東京家政大学 人文学部教授）

それでは、アプローチ手法検討部会の取りまとめをさせていただいております東京家政大学の平戸からご報告を申し上げます。皆さんのお手元に渡っております資料の3、こちらの1ページ目をご覧ください。左側がアプローチ手法検討部会の経過でございます。

第1回でございますが、こちらは令和6年の2月22日に行われました。私どものアプローチ手法検討部会は、委員の皆さんが大変現場経験をお持ちの方々でしたので、まずはその現場でご経験されているところを共有していこうということになりました。ホワイトボードを使いまして、表を作成しました。縦軸は子どもさんの不登校の状況の段階を分けました。問題なく通えている状態を0とし、一方でかなり深刻な状況を6とし、全7段階としました。また、横軸は3つの点を記載しました。1点目は、（支援者が）それぞれの状況に応じて把握すべき点や、実際のアプローチとして行われたことを記載していきました。2点目は、その状況において保護者との繋がりがあるのか、希薄なのか、あるいは全くないのかということ、そして横軸の3点目は、それではこの子どもたちが活躍できる居場所はどういうところがあるだろうかということを作りました。

意見としてでた主な内容といたしましては、皆さんのお手元にあります左側のところ、ご覧いただきたいと思います。まずは、実際にひきこもりなどが起こってしまっているお子さんについての成功事例をだし合っていました。様々な例がでたんですけれども、やはり非常に特徴的だったのは、いきなり何かなんでも学校に来てほしいというのではなくて、例えば、地域の清掃活動などの1回クッションを経て、もしくは民生・児童委員の方にご協力をいただいてなどという風に、急に、とにかくいきなりのゴールは学校ではないよということで、クッションなどをうまく使った成功事例がでてきたというのが特徴的なものでございます。

一方で、困難の事例の共有化もいたしました。委員さんたちがみんな領いて

おられたのは、なぜ学校に行かないのか、本人もわからない、ご家族もピンと来ないと。けれども、学校に行けていないと。この子たちを無理に学校に戻すというのではなくて、まずその理解と、そうは言っても学びたいという気持ちがあるというような、そういう情報共有もできましたので、そういうところをどう吸い上げていくか、どう結びつけていくかという意見が盛んにだされました。

そして、実際に、その成功事例、困難事例の共有に加えて、じゃあ実際にこういう風にしてみたという具体的なアプローチについても委員の方々におだしいいただきました。その中で、板橋区が近年力を入れておりますスクールソーシャルワーカー（以下「SSW」）などの積極的な活用が非常に効果を上げているというようなことがまずは挙がりました。また、実際にそういう支援をなさっている現場の委員さんからは、否定的な言葉かけではなくて、ほんの些細な気遣いですが、よく来たねというような肯定的な言葉かけが非常に良い結果を生むというような具体的なお話もありました。

様々な事例の共有化をしたうえでなんですが、実際に支援していくにあたっては、やはり支援に携わる人がどうしても不足している、どうやってこういう人たちを継続的に活用していけばいいかというのが課題であるというような意見がでてまいりました。以上が、簡単ではございますけれども、第1回のアプローチ手法の方で確認された内容でございます。

#### 坂本会長（板橋区長）

平戸副会長ありがとうございます。

次に、児美川副会長お願いいたします。

#### 児美川副会長（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

法政大学の児美川と申します。よろしく申し上げます。居場所検討部会のまとめ役をさせていただきましたので、簡単に内容についてご報告をさせていただきます。

資料3の1ページの右側を見ていただければと思います。この回は初回でしたので、まずは不登校がなぜ起きるのか、どういう状況で何が必要なのかみたいなことがあるわけですが、そういうことを踏まえた上で、特に居場所がどういう意味で必要であり、どんな居場所があると良いのか、そういう観点から、委員の方々それぞれが持っている課題意識をだし合って共有することから始めました。委員の方々は学校の先生も含めてそれぞれが現場をお持ちの方でしたので、それぞれの現場からどういうことが見えるのかみたいなことを全体で共有すると、そんなことをいたしました。

資料を見ていただければわかりますけれども、まず何より大事なものは、やっぱり子どもたちにとって安心・安全な場、それは学びであるし、生活であるし、成長・発達であるわけですが、そういう安心、安全な場が必要だと。その時

に、意見としてかなり複数でできたのは、評価をされることについては、子どもたちは相当に敏感になっているということでした。でも自分から「先生から評価される場には行きたくない」とは言えない一方で、ちゃんと自分が認められる、大人の言うことを聞いているから認めるのではなくて、ありのままの自分がちゃんと認めてもらえる、そういうところを子どもたちは求めているみたいな話はかなり複数でできました。また、そういうことが可能であるためには、やっぱり少人数の、子どもたちへの目が十分に届く少人数学級の話ができました。コロナ禍の時に、学校が再開した時にもすぐには一斉登校ではなく、おそらく多くの学校は半数ぐらいの登校であったわけで、そうすると、一クラス20人以下、10何人みたいな、その時の経験から、やっぱりその時は目が行き届きますね、みたいな話でした。

やはり子どもたちにとっての本当に安心・安全な場を作っていくってことが原点で、それが居場所ってことになると思います。ですから、居場所は学校以外のフリースクールとか学びの場とか、そういうところだけが居場所ではなくて、本来の学校だって当然居場所になりうるわけですし、むしろならなければいけない、そういう意味も含めてよく捉えようってことを共有しました。

また、その居場所が担うべき役割・機能としては、まずは学習保障と発達保障ではないかと。当たり前のようなことですが、学びをどういう風に子どもたちに保障するのかということと、子どもたちがどうやって成長し大人になっていくのか、どのように子ども同士や大人との関係を作るようになりってという発達の保障、その両者をどうしていくかという話になりました。

学習保障の方に関しては、これは、必ずしも（不登校児が）教室に戻ればおしまいではないよねと。一人ひとりの学習形態に沿った居場所づくり、例えば一人で勉強したい子もいるんですよ。だからその子も未来永劫一人で勉強しなさいとは言わないとしても、まずは現状がそういう状態であることはちゃんと認めてあげて、一人でも学べる環境を確保する。もちろん、その後に支援者が入ってくることはあってもいいわけですが、そこを強要強制するんじゃないくて、まずは一人で学ぶみたいなことも必要ではないかと。

また、発達保障についてですが、子どもたち同士のコミュニティってすごく大事で、学校みたいなあらかじめ組み立てられたクラスとか学級っていう中でのコミュニティではなくて、不登校の居場所みたいなところでも実は子ども同士が関係を作っていくって、ある意味でお店ができていく、そういうこともすごく大事にしていけないといけないのではという意見ができました。そのあたりの問題意識を共有して次回にまた意見交換しましょうということで第1回は終了しました。報告は以上です。

## 坂本会長（板橋区長）

ありがとうございました。次に「②アンケート調査結果報告」について、事務局から説明をお願いいたします。

## 高木課長（地域教育力推進課長）

それでは、事務局から、資料４に基づきまして、アンケート調査結果について、ご説明いたします。資料４をお手元にご用意いただけますでしょうか。

第１回の専門部会の居場所検討部会におきまして、不登校の状態にあった子どもたちの声を聞いてみたいというお話がありまして、事務局の方でアンケートを行うことといたしました。

時期としては、７月４日、５日に、方法としては、都立北豊島工科高等学校と同じく都立大山高等学校にご協力をいただきまして、定時制の生徒を対象に、国が不登校経験のある児童生徒に行ったアンケートを参考に、事務局で独自に作成しました調査票を基に４０名の生徒の皆様に匿名でご回答いただいたというものでございます。

時間の都合もありますので、ポイントを絞ってご説明させていただきます。

まず、問２において、これまで学校に通っていなかったことがあるかということで、あるという生徒が２３名おりました。この後の設問については、基本的にこの２３名の生徒を対象にご回答いただいております。ごく一部、２３名を超えておりますが、設問の対象とならない生徒も一部ご回答いただいたものでございます。

問３では、学校通っていなかった時期を聞いておりまして、中学生の時期が多い傾向がありました。一方で、小学１、２年生もあるところでございます。

問４では、学校に行かなくなった理由としては、なんとなくという理由は一定数あるものの、学校へ行く日の朝は起きられなかったり、体調が悪くなった、勉強が分からず、学校がつまらなかったという理由が多いという結果となりました。

問５では、居場所の周知に関しまして、自宅や学校以外の居場所について知っていたか聞いたところ、知らなかったという回答が半数を超えました。また、知っていた場合の知った方法としまして、インターネットやSNS、先生・友人、区の施設と様々といったところでございます。

問６について、学校に行かなかったときの自宅以外の居場所について、特段なかったか、学校内が多く、区教育施設も一定数いたことがわかりました。理由として、一人になれるといった回答と同じくらい、友人がいたという理由もありました。

続いて、問１０について、学校に行かなかったときにこんな場所があったらいいのと思う場所として、大人に注意されたり、勉強を強要されたりしない場所があつてほしかったとか、オンラインで学べる場所という回答が多くありました。雑駁ですが、説明は以上です。

## 坂本会長（板橋区長）

次に「③第２回専門部会報告」について、アプローチ手法検討部会・部会長

の平戸副会長から、続いて居場所部会・部会長の児美川副会長からご報告をお願いいたします。

#### 平戸副会長（東京家政大学 人文学部教授）

はい。それでは、アプローチ手法検討部会第2回の内容につきまして、ご報告申し上げます。資料3の2ページ目をご覧ください。前回の第1回が、自由に現状について発言をしていただいて、それを共有するということでございましたけれども、この2回目は、不登校の背景をまずは捉えながら、実際に何が必要かというものを、また具体的な例を皆さんで共有化したということでございます。また、先ほどご説明がありましたけれども、アンケート調査の結果がでておりましたので、それも踏まえまして委員から意見がでたということでございます。資料3、2ページ目の左側がアプローチ手法検討部会のまとめでございますので、これに沿いまして簡単にピックアップしてご説明いたします。

まずは、支援機関同士の連携強化が必要だったというような事例がございました。これは、実際に現場で支援をしておられる委員さんの方から、（不登校児の）保護者からの発信がとにかく少ないと、まして本人もひきこもっている状態、そういう状態の中で、いかに時折ある些細なSOSを見逃さないかということが大事であるというような具体的な例が語られております。

また、SSWやスクールカウンセラー（以下「SC」）に繋げるきっかけを見逃さない、そういうのを大事にして支援につなげることで、これが有効であったというようなご意見がでました。

また、その次の周知の強化でございますけれども、こちら先ほどのご説明にありましたアンケート結果でもございましたが、相談窓口がそもそもあるということを知らなかった、相談できるということをもっともわからなかったという声がございます。

こういうところを踏まえまして、実際の相談窓口であるとか支援機関が、こういうところがあるし、こうなると実際に相談をしていい、こういうことができるということを発信していくという、その情報がしっかりと繋がっていくことが大事ではないかというご意見もでました。

また、委員さんからは、実際に相談力というものが十分でない当事者あるいは保護者の方に、「相談してください」と漠然と言っても、実際には効果が上がらないのではないかと。そうではなくて、具体的に「こういうことがここだとできます」「こういう点がお答えとしてありますよ」というような具体的なことを発信していくというのが必要ではないかという意見がでました。

これらをまとめますと、何らかの情報ですとか、あるいはその情報をしっかりと吸い上げるですとか、そういう何かと何かを繋いでいくということにまとめられるのではないかというような方向性がでてまいりました。

さらに、子どもたちは「学びたい」とか「進学したい」という気持ちは持っている。その中で、自分だけでやれではなくて、様々な方から支えていただき

たいというような声がありまして、例えば、多様なニーズに応じた学習支援というところにもでてくるんですけれども、一人ではなく先生などが手伝ってくれるような場所というのは大変重要であるという意見がでました。例えば民生・児童委員や大学生ボランティア、あるいはSSWなど、様々な方が協力して支援をしてくれるとさらに有効だというようなことがでてまいりました。こういうところから見えてくるのは、「一人で頑張れ」ですとか「家族だけで乗り越えなさい」というのではなくて、その当事者を中心に据えて支えていくという、そのあり方そのものが検討されるべきではないかというところが見えてきたようなところがございます。さらにはですね、先ほど少し申し上げてしまったんですけれども、進学はしたいと、それから学ぶことに関心がないわけではないというような声を聞いてくださっている現場の委員さんのお話もございました。そういう中で、多様な真実の学びというものについてどう大事に吸い上げて、それを様々な形で支援していくかということが大切であるというご意見もたくさんでました。ここからは、学びの多様性とか学びのあり方ということがまとめとしてでてくるのかなと思います。

第2回のアプローチ手法では、そのようにですね、例えば何かと何か情報を「繋ぐ」ということ、あるいは、それらを「支える」ということ、そして多様性、多様な学びを尊重して「学びのあり方を掘り下げていく」、こういう、大きく分けますと3つの方向性の意見がでてきたということでございます。なお、これにつきましては、この第2回だけでは十分議論が尽くせなかった部分がございますので、第3回も引続きご議論いただく形になりました。第2回のアプローチ手法検討部会の報告は以上でございます。

### 坂本会長（板橋区長）

平戸副会長ありがとうございます。

次に、児美川副会長お願いいたします。

### 児美川副会長（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

居場所検討部会の方ですが、第2回は、第1回のそれぞれの委員の方々の問題意識、課題意識の共有を踏まえて、ではどういう支援ができるのか、その支援にはどんなことが必要かを議論しました。まず冒頭で、先ほどご報告のあったアンケート調査の結果についての意見交換をするところからスタートをしました。

（アンケート調査結果）資料4の内容ですけれども、私たちの部会で注目した点をご紹介します。まずは問5「自宅や学校以外の居場所があることを知っていたか」という設問ですが、「知らなかった」が58パーセントで、6割ほどいるわけですし、まずはここからスタートしなきゃいけないということを改めて認識した次第です。あるいは問8「学校に行かなかったとき勉強していたか」という設問を見ていただくと、「勉強していなかった」が64パーセン



トと、全体の3分の2であるわけですね。やっぱりそうなんだなっていうような感覚でした。先ほど学習保障という話をしましたけども、この現状を踏まえたうえでそれではどうするかという点について議論をしました。支援の中身やあり方の話の前に、どこに向けて支援をしていくのか、何を目標にして支援をしていくのかという部分です。

どこに向けてという点ですが、不登校のことを議論するときには、これはもう板橋区だけではなく日本全国で、文科省等も言っていることとして、子どもを学校に戻すということを一義的な目標にするのではなくて、子どもたちが将来社会的自立を果たせるようにしていくことを考える。もちろん戻れたら戻っていいわけですけど、だけど、学校に戻すことだけを絶対視するのではないですよ。とはいえ、社会的自立って何だろうかと考えた時に、実はこれが意外に難しいですね。経済的自立まで含んでトータルに考えるのか、もしくはそうではなくて、ある種の精神的というか、親からの精神的な自立ができてればそれでよしとするのか、はたまた、そういうところ自体がちょっとぐらついているのではないのかですとか、そのような話からスタートしました。どこに向けてゴールとして見据えるのかということについて、確かにこれは考えなければいけない重要な課題ですよねといった、そういうことも議論の中では論点としてでました。

もう1つ、何を目標にして支援するのかについてですが、資料内の上から2つめの囲み部分「支援情報の周知強化」という部分についても、周知強化の前に、そもそも保護者が子どもの状況に対して「無理に外に行かせる必要がない」

「本人が嫌なら仕方がない」といった、保護者も特に問題視していない、それはそれで仕方がないよって思っているケースが随分でてきているという現場の先生からのお話がありました。そうだとしたら、何を目標にしていくのかというところは、子どもだけでなく保護者に対する働きかけや情報発信の必要性もあると思います。そのうえで、どういう支援なりアプローチなりができるかという議論をしました基本的には多様な支援のネットワークが必要で、その中で情報共有であったり、専門家同士が繋がるですとか、地域にある様々な機関同士が連携するとか、いろいろな意見がでました。

私の印象的なことで言うと、例えばオンライン授業という分野がコロナ禍以降にでてきていて、学校にでてきて授業受けるのは難しいがオンラインだったらずっとそこに入られるみたいな、お子さんもでてきていることをどう踏まえて、積極的に位置付けるかですとか。もちろん、だからその場でずっと固定していったって、ずっとそれでいいのかという長期的視点での微妙な問題はあると思いますけども。まずは（学びの場として）でてこられるのであればオンラインから入ってみましょうみたいなこともあるわけで、このようなツールは今後積極的に活用できるのではないかという意見がございました。

さらに、資料の1番最後の囲み部分の中で「第3の大人」という表現があります。要するに、親でも教師でもない、居場所の指導者でもない、ご近所さん

や顔なじみなどのただの大人の存在って実は大事で、そういう人が子どもたちにどう関わるかってところは大きいのではないかといった話もありました。そういうところを全部含んで、多様な支援のネットワークの重要性を考えていく必要がありますねといったところで、第2回の部会は終了しました。報告は以上です。

#### 坂本会長（板橋区長）

児美川副会長、ありがとうございました。

それでは、ここまでの経緯について、委員の皆様からご質問を賜りたいと思いますが、いかがでしょうか。

（質問なし）

後ほど全体を通しての意見交換の時間がございますので、その際に再度委員の皆様からご意見を賜りたいと思います。

それでは、協議経過報告の続きに移ります。「⑤要点整理内容報告」について、事務局から説明をお願いいたします。

#### 高木課長（地域教育力推進課長）

それでは、資料5に基づきまして、要点整理内容について、ご説明させていただきます。資料5をお手元にご用意いただけますでしょうか。

先ほど両部会から協議経過報告がありましたとおり、第2回の専門部会におきましては、審議テーマの実現に向けて必要な施策について、委員の皆様からご意見を集約した結果として、両専門部会において、共通したキーワードがでてまいりました。そちらを整理したものが、資料5の上部でございます。

二つの専門部会に分かれて、ご議論いただいたものの、結局は、どのような居場所が必要で、その居場所につないでいくためにはどのようなアプローチが必要かといった内容がセットで話し合われることが多い状況となったため、審議テーマの実現のために必要なこととして、第2回の専門部会では、多くの共通した内容がキーワードとしてだされることとなりました。もちろん、それぞれの部会特有の議論、キーワードもございましたが、網掛けの部分については、両部門に共通して出されたというところでもあります。

そこで、事務局では、これらのキーワードに共通する視点を取り出して、視点の観点からグループ分けし、整理することにより、提言を対策・施策の3つの視点という括りで整理できると考え、提言の構成案としたところでもあります。

その視点が「繋ぐ」「学ぶ」「支える」という3つの視点であり、この3つの視点により、提言の内容を整理していく方向性はどうかということで、第3回の専門部会にそれぞれご提案し、内容や構成についてそれぞれの部会でご協議いただいたところでございます。

要点整理の内容としては、説明は以上でございます。

#### 坂本会長（板橋区長）

次に「⑥第3回専門部会報告」について、アプローチ手法検討部会・部会長の平戸副会長から、続いて居場所部会・部会長の児美川副会長からご報告をお願いいたします。

#### 平戸副会長（東京家政大学 人文学部教授）

はい。アプローチ手法検討部会の報告をさせていただきます。

本来ですと第3回から始めなければいけないところですが、先ほど第2回の説明が途中までとなっていましたので続きから報告させていただきます。資料3の2ページの左側をもう1度ご覧いただければと思います。

下から四つめの囲み部分「多様な将来設計への道筋創出」というところがございます。実は、実際にその不登校のお子さんたちに関わっておられる委員さんから、特に中学生は多くの子が「高校には行きたい」という希望がでていうご意見がございました。自分の学力とか勉強の取り組みとは別で、例えばスポーツが強いところに行ってみたいとか、吹奏楽をやってみたいとか、なんとなく先輩が行っているから憧れているとか、動機は様々ですけれども、そういうところを大事に吸い上げていくことが支援に必要なのではないかというご意見がでました。とても大事なご意見だったと思いますので、この場で申し添えたいと思います。

また、下から二つめの囲み部分「子どもの個性に応じた個別支援」についての支援のあり方でございます。高校生のアンケート、非常に私どもも参考になりまして、それを基にした議論がでたのですけれども、（資料4・問4「学校に行かなくなったきっかけ」の中で）「朝起きられない」ということが不登校のきっかけになっているというようなご意見があったと思いますが、割合として非常に多かったと思います。そういうことに対して どう支援をしていったらいいかという議論が第2回はでました。その議論を受けて第3回の専門部会ではさらに進められた内容が話し合われたということでございます。それでは、資料3の3ページ左側をご覧ください。

まず、第3回的前半は、アプローチ手法について何を重点的に行えばいいかという点に絞って意見交換を行いました。特に重要という部分では、まず何よりも根気強く積極的にアプローチを続けていくこと、積極的なアウトリーチをかけていくことが大事ではないのかという点でした。子どもや保護者からのサインがなくても、こちらからさりげなく声をかけていくこと、絶え間ないアウトリーチというのが必要ではないか。こういうところなどは、先ほどの話でもありましたが、例えば朝起きられないというお子さんなどに対して非常に効果的ではないかと思います。

それから、元々の不登校の原因の中に、特に小さなお子さんであれば家庭の

状況把握というのもやはり必要ということで、そういうことをきっちり把握し、把握しただけではなく、そのうえで適切な支援機関や専門員に繋げていくということが大事ではないかということでした。

また、繋がるということに関しても、支援者として特定の方がいる時はきちんと繋がっていたけれども、その方が異動してしまったりすると支援が途切れるということがでてきたという問題もでてきました。

そうすると、単に属人的に繋がるのではなく、組織的にきちんと連携をしていく、あるいは機関同士が、人が変わってもポイントをきちんと押さえて繋がっていくということが大事ではないかというのが第3回の前半部分では話し合われました。

後半部分では、事務局より示された提言構成案について話し合われました。まずこのことについて委員の方々からでてきたのは、実はこの「繋ぐ」「学ぶ」「支える」という視点についてです。視点そのものは分かりやすいのだけれども、主語が別々というか、誰の目線なのかがごちゃっとしているのではないかというご意見がでました。「学ぶ」というのは子どもの目線で、「繋ぐ」「支える」はどちらかという支援者側の意見であるというような意見がでました。

そうすると、そこをもう少し練っていくことが必要ではないかという意見がでて、委員さんたちと一緒に、例えばこういう風な言葉にしていってらどうかということも話し合われました。

例えば同じ目線で言うならば、例えば「繋ぐ」は「繋がる」だったらどうかですとか、「学ぶ」はそのままで、「支える」は「支えあう」だったら、もう少し目線が近くなるのではないか というようなご意見がでました。

また、これもとてもいいご意見だと思うのですが、今の現状の共有だけでなく、事前に予防するという観点がもう少し提言の中に含まれてもいいのではないかという意見もございました。成功事例などの中から、あるいは困難事例の中から、もしこうしていたらとか、こんなふうにしたらもっとという部分を共有化していくことで、予防というものを少し提言の中に強調してもよいのではないかという点でした。

また、板橋区としての不登校問題の傾向や特徴をもう少しきっちりと私たちが共有化をして、板橋区の特徴を踏まえた提言にしていければなおよいのではないかと。実際、板橋区にはたくさんの地域資源がございます。そういう部分をその提言の中に盛り込んで、支援としても板橋らしさをだしていければいいのではないかというご意見がでたというのが第3回のアプローチ手法のご報告でございます。簡単ではございますが、以上でございます。

## 坂本会長（板橋区長）

平戸副会長ありがとうございます。

次に、児美川副会長お願いいたします。

## 児美川副会長（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

居場所部会検討部会の第3回ですが、ただいま平戸先生がご報告されたアプローチ手法検討部会と同じような意見がでました。最終的には「学ぶ」「支える」という主語が子ども目線だったり大人目線であったり、ちょっとごちゃっとしていますねと。居場所検討部会としては、その部分を組み替えたほうがいいみたいな話になりました。その話に移るまえに何点かございます。まず全体像を見た上で、私たちの部会としては3つの視点、それぞれもちろん大事なことですけども、まずは学校という場所そのものがどういう居場所になっていくかって視点はもうちょっと見えるようにしてもいいかもという点です。

「学ぶ」という部分に関して、学校における学習保障って重要な役割が来るのはわかりますけど、学校は学習保障の場だけではないと思いますので、居場所としての学校の機能といった、そういうところをもうちょっと出してもいいのではという意見がございました。

また、「支える」という点に関して言えば、子どもを支えるのはもちろんですけど、家庭支援の必要とかもあるのではないかとという点もございます。今の問題を考えていたら、子どもを支えるためにも、その背景にあるご家庭をどう支えるかみたいなことですね。あるいは、支えられるべきは家庭だけじゃなくて支援者にも当てはまるのではないかと、支援者も十分な条件とか環境のもとで活動できているわけではなくて、そこをどう全体で支えていくかという、その視点もありますよねということでした。

また全体に、子どもの意見をきちんと聞くという観点もでました。まず当事者である子どもの意見を聞いて、そのうえで現状の支援体制等について点検をするみたいな、そのような視点が盛り込まれているとよいのではないかと思います。それに付随して、よりよい体制構築に向けて変化していく、今のあり方を変えていくっていう視点ですよ。それは学校のあり方もそうかもしれないですし、他の分野である例えば地域や家庭のあり方もそうかもしれないです。一方で、変えるという視点については、しごく当然のことでもあるから敢えて盛り込む必要もないのではという意見もございました。

先ほど平戸先生からもありましたが、未然の予防という観点についてはこちらの部会でもでてきました。むしろ予防の観点はもっと強くてもいいのではないかとということでした。

そういう議論を深めながら、最終的にこの3つの視点「学ぶ」「支える」「繋ぐ」については、「繋ぐ」は「繋がる」として子どもを主体にしつつ、「学ぶ」は子どもの視点、「支える」は大人の視点にしてはどうかと。そしてこの3つが横に並んでいるのではなくて、「繋ぐ・繋がる」「学ぶ」が上にあって、その下に「支える」といった見せ方ではどうだろうか。「支える」に関しては、直接子どもを支えるだけじゃなくて、家庭を支えるだったり、また一方で支援者も支えられたりっていう、重層的な構造というか土台のようなイメージで発想す

るほうが整理しやすくより分かりやすいのではないかという議論を部会の最後のほうではしておりました。報告は以上です。

#### 坂本会長（板橋区長）

児美川副会長ありがとうございました。つづきまして「(3) 意見交換」に移ります。

ただいまの協議報告の中で、要点整理として「3つの視点」での提言構成案が事務局より示され、その構成案について第3回専門部会でご議論いただいた内容についての報告がありました。

この点を踏まえまして、今回の審議テーマである「不登校の背景を的確に捉えた、多面的な支援の実現に向けて」の提言の原案作成に向けたご意見を委員の皆様から賜りたいと思います。いかがでしょうか。

#### 坂野委員（東京板橋ロータリークラブ）

坂野と申します。よろしくお願いします。

子どもたちを取り巻く保護者、支援者の環境については、ひと昔前と今とは全くあり方が違うように感じたんですね。学校の先生の指導もそうですし、学校とPTAとの繋がり方もそうです。また、部活動もそうです。今は先生たちも多忙で、部活動をはじめとした先生方の働き方改革を推し進めている状況でもあります。しかしながら、部活動を通じて子どもたちと先生の繋がりを強くし、信頼関係が生まれているとも思うのです。先生方と生徒が繋がりを持つ機会は、大事にしなければならないのではと思います。一方で、報道でもありましたが、今年は去年よりも不登校児数が多いですね。不登校対策も含め、関係者が一生懸命取り組んでいても未だに増加傾向であるのはどうなのかなと感じています。その点について、区と教育委員会はどうにお考えで今後どのように展開していくのかということをお聞きできればと思います。

#### 坂本会長（板橋区長）

今回のテーマである不登校対策については、本協議会においても専門的知見を持った方や不登校児への対応経験をお持ちの方、また学校現場に直接携わっていただいている方など、各方面からの方々が参加いただきまして、昨年からの議論をしていただいております。委員の皆さまからの意見を提言としてまとめていただいたうえで、区また教育委員会として今後どのようなことができるのかということを確認にして進めていきたいと考えております。

貴重なご意見ありがとうございました。

お時間に限りがございますので、ここで一度区切らせていただきたいと思います。さらにご意見をいただけます方は、後日事務局へご伝達をお願いいたします。

本日は、様々な分野でご活躍されている皆様から、「不登校の背景を的確に捉えた、多面的な支援の実現に向けて」の提言の原案作成に向け、これまでも専門部会を含めたご意見を頂戴いたしました。

本日頂いたご意見とこれまでの専門部会のご意見を整理したうえで、より具体的かつ実効性のある提言の原案を作成し、次回の全体会にお諮りしたいと考えております。また、原案作成の際には専門部会の皆様にも再度ご協力をいただけますようよろしくお願いいたします。

最後になりますが、本協議会の委員の皆様には、それぞれのお立場から子どもたちへの支援に今後も変わらぬお力添えをお願い申し上げまして、本日の議事を終了とさせていただきたいと思っております。

そのほか、事務局から連絡事項等ございましたらお願いいたします。

#### 高木課長（地域教育力推進課長）

< 事務連絡 >

#### 坂本会長（板橋区長）

それでは、以上を持ちまして、令和5・6年度板橋区青少年問題協議会第2回全体会を閉会とさせていただきます。

本日はお忙しい中、ご出席いただきましてありがとうございます。